

河童橋

河童橋は、上高地の中心を流れる梓川に架かる木製の吊り橋です。明神岳（2,931m）と奥穂高岳（3,190m）を林立する谷間に挟み込む、美しい眺望の橋で、シーズン中は多くの観光客で賑わいます。河童橋の下には、冷たく澄んだ梓川の流れの中に川石や魚が見えます。

初代の河童橋は跳ね橋でしたが、1910年に再建されました。河童橋は、当時の上高地の様子を克明に描いた芥川龍之介の小説『河童』（1927年）に登場します。精神科の患者である主人公が、いたずら好きで時には邪悪な性質を持つ水の精霊である河童の国に入った物語を語っています。そして、人間の社会よりも河童の社会の方が好ましいと結論づけています。

今日、河童は架空の生き物として、日本の文化の中で親しまれています。緑色の肌をした人間のような生き物で、足と手には水かきがあり、背中には亀のような甲羅があり、頭には水の入ったお椀のような窪みがあります。民衆の知恵では、河童に会ったら丁寧にお辞儀をするようにと教えられています。なぜなら、河童がお辞儀をすると、頭から水がこぼれて無力になるからです。また、地方によってはキュウリが大好物だと言われており、キュウリの入った巻き寿司を「かっぱ巻き」と呼ぶ語源にもなっています。

橋がこの架空の生物にちなんで名付けられた理由については、いくつかの説があります。昔、河童（河童のような水生生物）が近くの深い淵に住んでいたからという説や、淵などの上に橋が架かっていたという説があります。また、橋ができる前、服を頭にのせて川を渡っていた人が河童に似ていたからという説などがあります。